山林所有の變化に伴なう村落社

會構造の地域的差異について*

——大井川・安倍川上流山村に於ける例——

横 田 忠 夫**

1. はしがき 明治以降急激に發達した我が國の資本主義は舊來の封建的社會構造の變革を促し、又近代工業の發達と交通機關の進歩は新たなる需要と市場を開き、從來は無價値であつた自然に對し資源としての價値を作り出した。所でその近代化は後進國の例に漏れず、産業構造の上から見れば農業の犠牲の上に立てられた商工業の跛行的な發達であつた。そして舊來の封建制下自然經濟の支配下にあつた農村は、こゝに上からの力として交換經濟への轉換を餘儀なくせられると共に、その農村の置かれている地理的條件即ち都市との距離、農業生産力、新たなる資源によつて地域的に獨自の適應活動を起すに至る。

こゝに於て封建時代には上からの強制によつて明瞭に表現されなかつた農村の地域性が顯著に具現せられると共に又農村から分離した村即ち林業村・鑛業村等が發生するのである。その例として本論では舊來に於ける山間農村が如何にこの近代化の波によつて變貌し、又その地理的位置によつて變革せしめられたかを述べる事とする。

舊來の山村——それは劣惡な自然條件の下に於ける自給農業の村であつて多くの場合山林は單に焼畑地として利用されるに過ぎず、豊富な水力も何ら價値の無い物でしかなかつた。従つて平野農村と異なる所は劣惡な條件の下に農耕を行つている農村としての差異でしかなかつた。所で現在の山村はどうであらうか。そこに大きな變貌を見る事が出来るのである。即ち山林は森林資源として大きな經濟的價値を持つに至り、谷川は電力エネルギーの根源として大きな意義を持つに至つた。そして山村の農民は舊來の自然經濟から交通經濟へと轉じ、自給農民から或る場合には山林地主へ、又或る場合には林業勞務者へと轉じ、新たなる生活環境に卷き込まれ、そして平野農村とは全く異なつた生活集團が生み出されたのである。

しかしその變化は山村に於て一樣に行われたのではない。その山村の置

* 1951年秋季、および1952年春季日本地理學會大會で發表。本研究は科學研究獎勵金の補助を受けた。

** 東京大學教育學部附屬高校。

地理學評論 25卷12號(1952年12月)

第1圖 安倍川・大井川上流域圖

の中で生活面でも意識面でも從屬せしめられて居り、又ある部落では階層が平均化され個々の部落民が可成りの自主性を持つている場合もある。それに部落を単位とした生活手段・生活水準にも著しい差違が見られる。そしてその地域性は何ら偶然的な配置を占めて居るのでなく、上流下流によつてその差違が極めて明瞭に現われて来る。所でこの様な社會關係はまず封建時代に於ける各部落に於て大して差違の見られなかつた封建的社會關係が、以後の歴史的變動によつて部落それぞれの變革を遂げ、この様な地域性を生じたと見る事が出来よう。しかるに社會關係を規定するものは生産關係であり、生産關係が最も現實的に具體化され表現せられるものは土地所有關係であるので、まず部落に於ける土地所有關係の差違を通觀して見る事にする。

3. 各部落に於ける土地所有關係 そこで觀察・聞込みによつて社會關係に於て顯著な差違を表現した所の、4個の部落の土地所有關係をかゝげてそれを比較して見る事とする。

(1) 大河内村	ヒラノ平野	(2) 大河内村	有東木
(3) 梅ヶ島村	新田	(4) 井川村	田代

まず、土地名寄帳により各戸の山林・耕地所有を調べ、縦軸に山林を、

かれて居る位置により（即ち都市との交通地位、山林の種別・所有形態農業生産力）それぞれ異なつた變貌をとげているのである。そして山村間に於て歴然とした地域性が現出されたのである。今こゝにその一例として静岡縣大井川上流部及び安倍川上流部の山村に於ける實態を報告する。

2. 調査地域の概観 大河内・梅ヶ島・井川3村の觀察・聞込みによつて最も顯著に現われる特徴は、各村の部落内に於ける社會關係に差違の見られる事である。即ちある部落では1, 2の有力者によつて社會關係が規定せられ、部落民はその機構

第2圖 a 各部落土地所有關係——1

横軸に耕地をとつてグラフとした(第2圖). 耕地は畑・茶園を含む. なお, この地域には水田は無い. この作業によつて次のように各地域の特徴があらわれた.

(1) 平野 土地所有關係を見てまず感ずる事は明瞭な階層分化である. 即ち 400 町歩に近い山林を持つ大地主と, 山林 20 町以上・耕地 4 反歩以上の上層, 及び山林 7~8 町・耕地 4 反歩以上の中層, それ以外の零細な下層がグラフに現れている. これは部落内に於ける土地所有の變動が行われた事を物語っている.

第1表 土地所有廣狭別農家戸數(カッコ内は%)

(2) 有東木 平野 部落と對稱的な點が注目せられる. 即ち地主層, 上層部が缺除し, 大部分が中層部と下層部によつて占められている.

		平 野	有東木	新 田	田 代
山 林	2 町未満	20(36)	32(40)	29(52)	37(54)
耕 地	1 反未満				
山 林	20町-2町	30(36)	32(40)	20(36)	13(19)
耕 地	1-4 反				
山 林	20町未満	11(13)	14(18)	6(10)	16(23)
耕 地	4 反以上				
山林	20町以上	10(12)	2(2)	1(2)	2(3)
山林	100町以上	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)
計		82	80	56	68

(3) 新田 こゝも

有東木と同様な傾向が見られるがなおその上, 有東木より中層部が少數でゐる.

(4) 田代 新田と同傾向で耕地面積は大きい. これは最も隔離された部落であるので疎放的經營が行われている關係であり, 農業主體の村では

第2圖b 各部落土地所有關係——2

ない（又は統計の不備かも知れぬ）。

この様にグラフによつて土地所有關係に於ける差異を知り得た。所で平野以外の3部落に於ては山林は誰の手に掌握されているのか。それは村外地主の所有に歸しているのである。そこで各村に於ける村外地主の所有割合を見るとその關係が明らか

第2表 村外山林所有者*

	大河内	梅ガ島	井川
山林面積	5,400町歩	7,700	30,200
村外所有面積	1,000町歩	4,600	2,400
村外所有百分率	20%	60	80
10町歩以下	7戸	4戸	2
10～20	6	5	10
20～50	4	5	10
50～100	—	1	4
100～500	—	4	6
500～1,000	—	—	2
1,000～10,000	—	—	1
10,000町歩以上	—	—	1
計	17	19	36

* 零細山林地主はこの表に含まれない。

にされる（第2表）。しかし、こゝで村外地主の山林所有規模が各村によつて異なる事は、その山林經營の差違となり、従つてその村の社會關係にまで影響を及ぼして來る事に注意しなければならぬ。即ち有東木のある大河内村は零細山林地主が多く、新田のある梅ガ島村は中小地主、田代のある井川村は大山村地主が所有している。

4. 土地所有關係の地域的差異をもたらした所の要因について 前述の如く部落に於

ける土地所有關係の差異が明瞭になつたが、こゝで、次に何故にこのような地域的差異を生じたのかを究明しなければならない。まず、この土地所有關係を歴史的に考察すれば殆んどが明治以後の變動の結果によるものである。たゞ平野部落のみ江戸時代から地主の發生が見られたのであるが、それも各部落について時代を遡らせれば、ほぼ同條件の土地所有關係から出發し、現在それぞれ異つた形態を呈するに至つたと考えて良いであらう。そこでその出發の基底を封建制下の農業を主體とした封鎖的自然經濟に於ける土地所有關係に置く。即ち各戸はそれぞれ自給に必要な耕地及び山林を所有し、又或る場合には共有林を持つて居つた。そして封建階層が確立せられて居つたのであり、無論村外地主や村内商業資本的地主の發生していない所の村である。それが平野部落に於ては商業資本的地主の發生を見、新たな階層分化が部落内で行われ、他の部落では、山林村外地主に山林の大部を掌握され、封建的階層關係がくずれ下層に集中した。そこで平野と他部落とを比較しながらその要因を検討する。

(1) 平野 他部落に比して最下流にあるこの部落は、交通地位の有利性から早く商品經濟が介入したであらうし、山林も商品價值を持つに至つたであらう。又下流にある事は農業生産力が自然條件の良好な事によつて高い地位にある。これらの條件が封建階層關係を基盤として小商品生産農家・林業農家の發達を促進せしめ部落内に於ける階層分化の因をなしたのである。又商業資本的地主の部落内に於ける發生は、交通地位の良好な事が村外部市資本の介入をまたずして部落内に於て資本の蓄積を生み商業資本家が發生し得たのだと解される。

(2) 他の3部落 交通地位の悪い他の3部落は商品經濟の介入が極めて遅く、明治まで自然經濟が支配的であつた。所で明治以降日本の近代化は山村に商品經濟化と云う嵐を伴つて侵入して來た。しかるに交通條件の悪いこれらの部落では直接に都市や平野農村との經濟交渉を行い得ず、商業資本をその仲介として行われた。従つてその近代化は商業資本によつて遂行されたのである。所で商業資本は有利なその地位を利用して、所謂益暮決算を建前とする半現物的取引を行い大きな利益を得た。一方負債を負つた部落民はその代償に徐々に商品價值を持つに至つた自己の山林を商業資本家に提供するに至る。この様にして村外地主が發生したのである。そしてこれら部落では低い農業生産力・劣惡な交通條件によつて、村内に於ける階層分化が行われずに逆に外部からの強い經濟力によつて封建的な階層關係も崩壊し、殆んどが林業賃労働者に轉じてしまつたのである。しかし、今まで述べたのは、この3部落を總體的に平野部落と對比した場合の

特徴であつて個々の部落はそれぞれ性格を異にしているのである。

(a) 有東木 この部落に於ける村外地主は都市（主に静岡市）の間屋が主であつて比較的小規模である。これは前述の様な關係による商人の山林地主化であつて、森林經營には極めて消極的であり、財産として山林を所有しているに過ぎない。

(b) 新田 この部落では中小山林業者・製材所の所有する場合が多い。その點有東木と異なる。しかし地主は山林經營には消極的である。

(c) 田代 大山林業者に掌握されている部落である。その所有時期は明治中期から大正の初期であるが、この地域が大山林業者の所有に歸した原因として次の様に考えられる。奥地林は木材が運送費に多大の部分を必要とするため大量に伐材し流送等の大規模な輸送手段によつてコストを下げなければ利益が上らない。従つて大山林業者が大面積を所有した時に於て始めて商品價值を持つに至る。従つてこの地域には大山林地主が出現した。この場合には山林地主は山林經營者であり積極的に山林を經營している。その點、他部落とその性格を異にしているのである。

5. 土地所有關係により規定せられる部落の社會關係 こゝで再び概説にもどり各部落の社會關係を土地所有關係との關連の下に考察して見る。社會關係は日常生活の種々相に於いて表現せられると共に、又部落に於ける行事、數部落を包含する所の行政村に於ける政治問題等の特殊な事件に於ても把える事が出来る。各部落の社會關係に於ける特異性について以下述べよう。

(1) 平野 この部落に於ては一地主によつて社會關係のすべてが規制にされていると云える。多くの貧農は山林の貸借關係を通じて地主との間に勞働力提供・盆暮等の儀禮を通じて擬制的親子關係が生じて居り、意識的にも行動的にもその制約の下に置かれている。従つて部落民の自由は極めて制限せられている。しかし部落民には階級意識は殆んど見られないと云つて良い、その理由としては多くの觀點がありうるであろうが、地理的見地からは次の様な事が考えられる。行政村（大河内村）はこの部落を含めて數部落より構成せられているのであるが、行政村の政治問題に於て部落間の利害關係の生ずる場合、この様な有力な地主を持ち又行政管轄者がその地主勢力に占められて居る關係上、自部落に有利な如く展開されるのである。即ち部落内の地主對貧農の對立關係が、部落對部落の對立關係によつて農民の階級意識を弱化せしめる傾向に働いていると云う事が出来る。これは同一の行政村にある、次に述べる有東木部落と對稱的な關係にあると云えるのである。

(2) 有東木 山林を唯單に財産として持つ所の小山林不在地主によつて山林を收奪されたこの部落は、不在地主の社會的強制はなく階層的に平均化している關係上、部落内に於ける個人の自由は平野部落に比べると比較的許されて居り、平等な立場にある。しかし階層的に平均化していると云つても社會關係の主導性は數名の上層部によつて握られている。そして部落内に於ける社會活動は極めて活潑であり、青年團・婦人會・公民館施設・婚禮・葬祭の簡素化・協同製茶等、具體的活動に於て最も進んでいる。だがこの様に部落内に於ける社會活動が活潑なのに對して村内に於ける部落の勢力は極めて弱いのである、その理由は部落としての經濟力・政治力の弱い事である。即ち前に述べた山林を收奪せられた部落だからである。又部落内活動の活潑な事はこの部落が行政村中最奥部の孤立した地位にあり、その交通地位と經濟的劣勢が他部落から蔑視せられ、それが逆に作用してその活動を旺盛ならしめる起動力となつている事も見逃せない。

(3) 新田 この部落は部落構成者中に河川工事等で入村した者の居残りを含んでいる。それに山林賃労働者が多い。従つて社會關係も他部落と可成り異つて居り、近代化された面を有する。階層關係は土地所有關係からは平均化されてはいるが、賃労働による収入の個別的な差異、耕地の有無によつて部落内に視點を置くと見られる様であるが、しかし山林村外地主中伐材業者が多くなり直接伐材業者との接觸がある爲、業者の上からの壓力を部落民が全般的に受けていると云えよう。

(4) 田代 土地所有關係から見ると2大山林地主に完全に掌握せられた部落である。従つて舊來の封建的階層關係は全く崩壊し上層部が没落して下層部に集中し自給的農業を伴つた林業労働者へと轉じている。そして山林地主は有東木の場合等と異つて直接森林經營者であるから、それが社會關係にも強く押被さつて居り、平野部落と同じく擬制的親子關係が見られる。しかしこの場合山林地主は部落民を單なる安價な労働者として利用しているに過ぎず、平野部落の場合の様に部落と云う地域社會集團を通して地主と貧農の利害關係が一致すると云う場合は殆んどない。即ち2大山林地主はこの部落だけでなく、より大きな地域社會の上に利害關係を有するのである。(しかし村との關係に於ても利害關係は相反する)。井川村は現在に至るまで自動車路1本ない隔離された村であるが、村の交通發達に對する強い要望に對して2大地主は極めて冷淡である。何故ならば、交通路の開通によつて中小林業資本が侵入し來り、今まで安價に購入しえた自己所有外の山林價格が上昇し、勞賃の高騰が起り、山林の伐材から製材までを一貫して行ふ經營は不利となるからである。所で、これら山林業者は流

送によつて極めて安價に木材輸送を行つており、自動車路の開通はこれら業者に対しては益する所少いからである。しかし、税金關係では村にとつて業者は大きな財源で、之が村の業者に對する立場を弱くしている。従つて兩者の關係は全く山林地主が部落民との間に「山林の農業用使用（切替畑、薪炭採草）を許可する」と云う事を基盤にして擬制的親子關係を造り出し、それによつて安價な勞力を得んとする術策である様に思われる。

6. 結論 以上述べた様に山村社會構造の地域的差異は歴史的發展がその地域的社會の置かれている地理的條件によつてそこに夫々特有の土地所有關係を生じ、その土地所有關係の差異によつて規定せられて行くと言ふ事が分る。これは單に山村の變貌に止まらず歐米に遙か後れた封鎖的社會であつた所の我が國の明治以降に於ける資本主義的發展に於ても世界を對象として同様な考察がなし得られる様に思われる。（1952年6月10日受理）

参 考 文 献

1. 青鹿四郎：安倍川沿岸に於ける農業地域 農業經濟地理に收録（1935）
2. 上野福男：安倍川及び大井川上流地域の人文地理的考察 大塚地理學論文集4巻。

THE CHANGE IN THE POSSESSION OF FORESTS AND THE PROBLEM OF THE DIFFERENCE AMONG THE RURAL COMMUNITIES [Tadao YOKOTA]*

The author investigated some villages at the upper streams of the River Ōi and Abe, Shizuoka Prefecture. Consequently I understood that the internal social relation of the village at the upper stream of the river was extremely different from that of the village at its lower stream. I also noticed that the difference in the possession of forests was greatly related to the difference in the social relation as a result of an investigation in regard to the possession of forests in each village. Having researched how the difference in their possession occurred in those villages, I observed that ultimately it had been caused by the geographical conditions of facility or difficulty of traffic (communication), the difference in agricultural productivity etc.

I could understand that at the lower stream of the river, the forests were monopolized by a few men who lived in the village, while in the upper stream of the river, they had been transferred to timber merchants or other ones who were outside those villages. It was also known that the difference in the powers of the forest-owners had caused the difference in the social relation in each village.

* Tōkyō University Attached Secondary School.